



Japan Architectural Consortium of Students

全日本学生建築コンソーシアム

後援:朝日新聞社、ジャパンホーム&ビルディングショー事務局

2012

residential design
competition
「住宅設計コンペ」





2012

residential design
competition
「住宅設計コンペ」

theme

rule

「自分の家」

10年か20年先の、生活スタイルと住処を自分のこととして考えてください。
具体的には、仕事は何をどのような形で行っているか。家族はどのような形をとっているのか。
どんなところに住みたいなどは、自分で想定してください。10年か20年では、都市の形態
もシステムもそれほどの変化はないのでしょうか。

そこで、漫画のような夢物語を描いても、「学生時代の思い出」で終わるような案は、
このコンペでは評価しません。喝采を送りたくなるようなアイデアも実現への一歩が見えな
いものは評価しません。現実の地平を切り開き、壮大な構想も、実現化する足腰の強さが
見て取れないものは評価しません。だからと言って、現実的などで手に入るような家、
べつに諸君が考えなくても出回っているような家は、論外です。

住宅を個別的なものと考えて、「自分しか住めない家」を考えるも良し、「何々邸」ではなく
「住居」として住宅の普遍性を考えるも良し、あなたの考える「自分の家」を作ってください。

今回は、二つの土地を用意しました。「都市型」と「地方・郊外型」のどちらかを使えるとして、
各自選んでください。建設資金は融資します。しかし、そのどちらも拒否し、戸建て住宅を
好まない人は今回は辞退してください。

design condition

建物の配置から仕様まで、総合的に提案してください。

テーマの解釈は自由です。文章でご説明下さい。

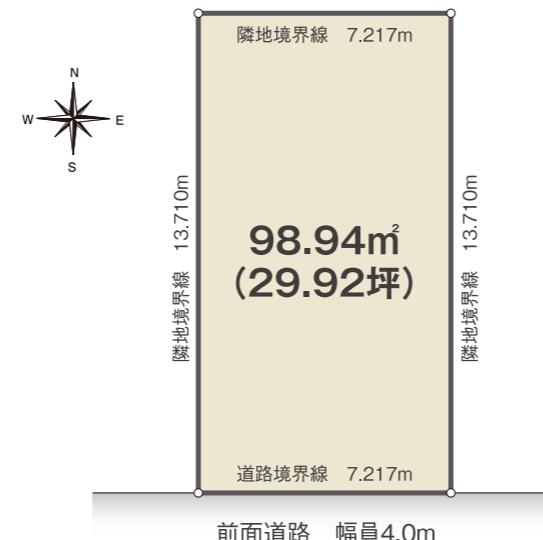
本コンペでは、実際に建築・販売ができることも理想と考えています。従って「自分の家」という具体的で現実に裏打ちされたものであると同時に、一方で、一般の共感を得ることも必要だと思います。将来的に質の高いデザイン住宅の増大に寄与することを主催者は願っています。

■ テーマ 『自分の家』 ■ 敷地条件 『都市型』・『地方・郊外型』の2パターンから選択

都市型

- ◆ 地域：関東地方のある地域を想定
- ◆ 用途地域：第二種低層住居専用地域
- ◆ 敷地面積：98.94m² (29.92坪)
- ◆ 建蔽率：60% 容積率：160%
- ◆ 前面道路幅員：4.0m
- ◆ 地盤高低差：無し
- ◆ 地区計画：無し

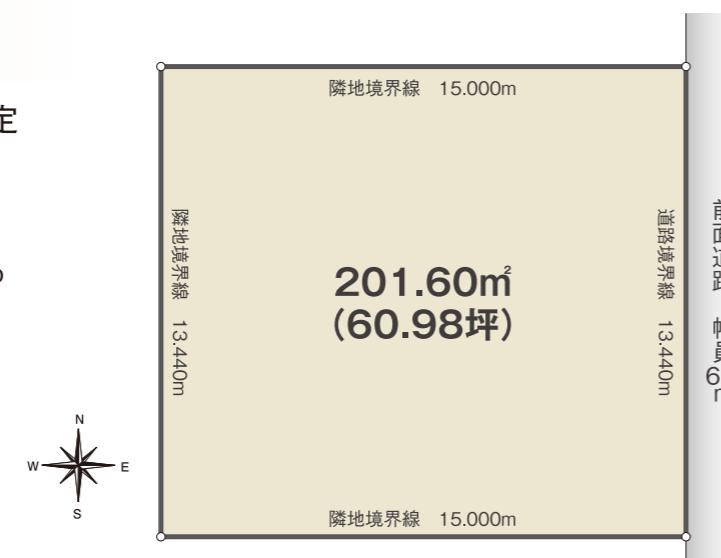
※記載項目より細部にわたる条件については、常識の範囲内で各自想定のこと。



地方・郊外型

- ◆ 地域：甲信越地方のある地域を想定
- ◆ 用途地域：第一種住居地域
- ◆ 敷地面積：201.60m² (60.98坪)
- ◆ 建蔽率：60% 容積率：200%
- ◆ 前面道路幅員：6.0m
- ◆ 地盤高低差：無し
- ◆ 地区計画：壁面後退距離
隣地側1.0m以上(仕上げ面)、道路側1.5m以上(仕上げ面)

※記載項目より細部にわたる条件については、常識の範囲内で各自想定のこと。



■ 建築条件 両条件共通／木造在来工法、建築基準法上、建築可能なこと(建築に関わる各種法令を遵守)

※このコンペにおいては、「都市型」・「地方・郊外型」の選択自体は審査対象、審査基準とは無関係です。そこに設定された生活を営む家として、また都市環境の中において、どのように考え設計されたかを見て評価します。

応募資格 ○平成24年4月1日現在在学中の学生(大学・大学院・短大・専門学校他)

1次審査要求内容

- 設計図面(縮尺1/100)
- 配置図(1階平面図兼用)
- 各階平面図(北を上部に配置)
- 立面図(2面以上)
- 断面図(1面以上)

○外観パース(模型写真に代えても可)

用紙規定：厚紙A3サイズ

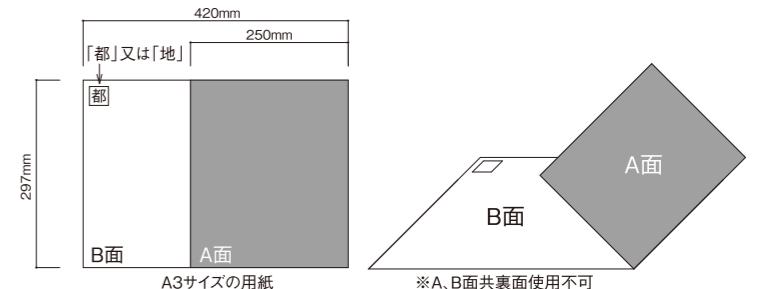
(右図参照)
<ケント紙程度>
(297mm×420mm)

1.5枚

横使い右綴じ

(右図参照)

※ボードは避けてください。
丸めないでください。



A面：「自分の家」をどのように使うか、すなわち誰と住むのか、自分は何をしていてどのように使うのかなど、簡略に説明してください。文章は可能な限り少なく、分かり易く工夫してください。この面に外観パース1面以上を描いて下さい。室内パースあるいはイラストなどは自由とします。

B面：各階平面図、立面図2面以上、断面図1面以上。B面の左上に約3cm角の大きさで、「都市型」を選んだものは「都」、「地方・郊外型」を選んだものは「地」という漢字を分かり易い書体で記入すること。B面は以上の他は記入しないでください。

※1次審査通過作品：「都市型」「地方・郊外型」各10作品は選び、他は上位から10作品を選び合計で30作品とし、入賞といたします。従って結果は必ずしも同数とは限りません。尚、第二次審査では模型(1/50のみ1個)とA4サイズ(1枚)の設計主旨説明書を求めます。詳細は1次通過者に直接通知します。

- 提出先 (2ヶ所)**
1. 図面郵送：JACS新潟事務局
〒950-0148 新潟県新潟市江南区東早通1-1-40株式会社内「2012 設計コンペ係」宛
Tel.025-383-3003 Fax.025-383-3733
 2. 図面データ送信：kazama@states.co.jp
郵送図面をデータ化(pdf、もしくはjpeg:200dpi以上)し、フォルダにまとめ圧縮して送信

2次審査要求内容

- 設計趣旨説明書(用紙規定:厚紙A4 サイズ<210mm×297mm> 1枚)
- 模型(縮尺1/50)(敷地を含む全体模型1点(それ以外の模型提出は失格))

サ イ ズ : w60cm×d60cm×h45cm以内(ベースを含む)

材 質 : 紙、バルサ、スチレンベーパー等軽量なもので、油土等の重いものは避けてください。
展示中の自然破壊には責任を負いません。

- 提出先 (2ヶ所)**
1. 設計趣旨説明書、模型郵送：JACS東京事務局
〒136-0072 東京都江東区大島1-30-3株式会社アリエ・ジャム内「2012 設計コンペ係」宛
Tel.03-3685-2511 Fax.03-3685-2514
 2. 設計趣旨説明書データ・模型写真1枚送信：kazama@states.co.jp
(pdf、もしくはjpeg:200dpi以上)し、フォルダにまとめ圧縮して送信

応募にあたっての注意事項

- 応募は1人につき1作品(グループでの応募も可能)
- 応募作品は未発表の作品であり、他のコンペに提出していないものに限ります。
- 設計図面、設計趣旨説明書は、規定サイズに印刷出力して応募して下さい。
- デジタルデータのみの応募は認めませんが、入賞作品はWEB上にて全て公開しますのでデジタルデータを予めご用意下さい。(pdf、jpeg 形式のみ)
- 提出する設計図面、設計趣旨説明書、模型の裏面には必ず氏名、受付番号をご記入下さい。

2012 residential design competition
「住宅設計コンペ」

最優秀賞 「渦巻く長廊家」

芝浦工業大学 大学院 建設工学専攻 中川 達也



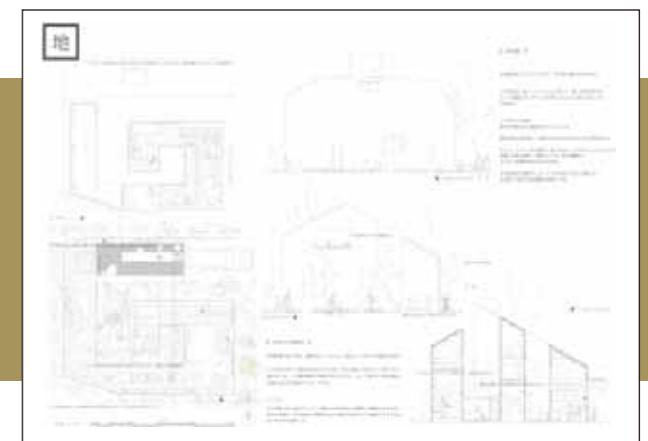
Concept

私は今年の夏に引っ越しした。前の家は古くて狭いマンションの一室、それが私の原風景。今のは広くて、自分の部屋もできて、前の家より自由がきくかもしれない。でも家具の置き方が分からない、家族との距離は遠くなる。そこで生活は私本来のものではないのかもしれない。

そこで私は自分の家を狭いものとして提案する。

この家は、家自体が家具であり、家族との距離も近く、庭さえも手の届く距離におかれ、その庭は町ともつながる。

それは生活を包み込む貝殻のようでもあり、周辺を取り込む草葉のようでもある。町、環境、家族、生活、すべてが等しく豊かに近づく、この関係性こそ、いっぱいに敷地を占める従来の住宅ではなく、今後あるべき住宅の姿でないだろうか。

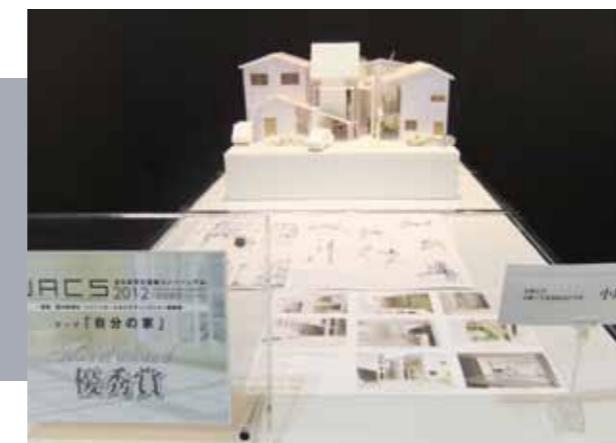


2012

residential design
competition
「住宅設計コンペ」

優秀賞 「豊かな孤独になれる場所」

九州大学
芸術工学部 環境設計学科 小島 衆太



Concept

住宅が個人で完結せずに、もっと他の要素と関係をもたせたい。

単に開口によって開くのではなく、「嫌じやない他の要素」と関わりながら暮らす生活。

閉じ そして 開いた

連続し そして 分割された

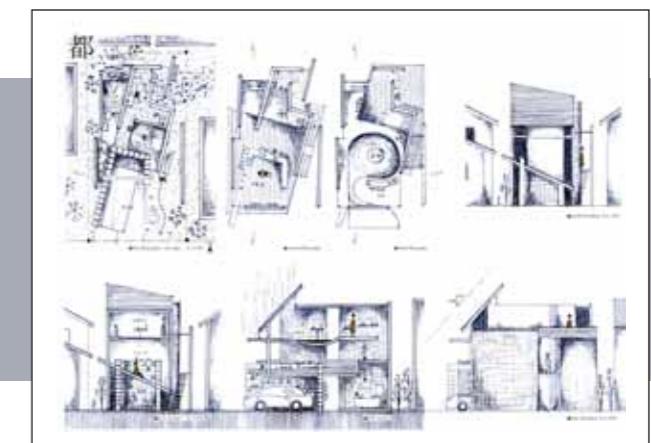
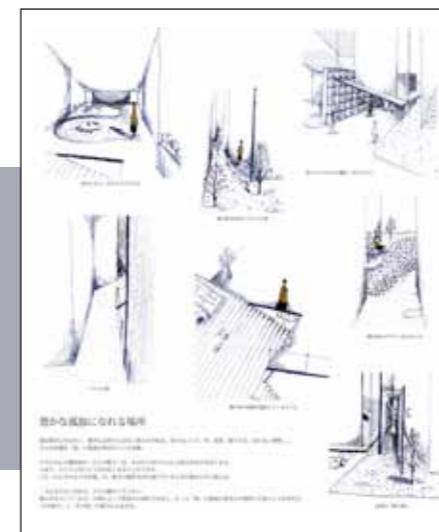
狭くて そして 広い

近くて そして 遠い

他人の家のように そして 自分の家のような。

異なるスケールをまたぎ、複数の焦点から成る

そんな、豊かな孤独になれる場所。



2012 residential design competition
「住宅設計コンペ」

優秀賞 「市中の山居」

京都工芸繊維大学 大学院
工芸科学研究所 建築設計学専攻

伊藤 祐紀



Concept

私は「自分の家」をいわゆる「家」というモノではなく、小屋のような小さな拠点のようなモノが様々な場所に欲しい。

小屋という最低限の機能、空間を備えた拠点が各場所、海沿いや山奥、島、農村、都市部など各拠点を点々としながら生活する、そんな住まい方が欲しいと考えた。

今回の計画はそんな住まい方の一番大きな拠点として都市部に小屋を提案する。

都市は建物がせめぎ合い、オープンスペースと言える場所が少ない。

しかし、上空には無限のオープンスペースが広がり、誰のものでもない空が広がっている。

この建築は、地上面の道路の水平的な流れを上空のオープンスペースへと変換する装置、シフターとしての小屋である。

地上面に広がる庭(オープンスペース)を取り込みながら、外部が反転したような浮いた内部空間が展開する。

都市の中の庭を小屋から見下ろす姿はまさに山を想起する、「市中の山居」である。



2012 residential design competition 「住宅設計コンペ」

佳作 (28点・順不同)



「気になる家」

工学院大学 大学院 工学研究科建築学専攻

古俣 尚志

「この家は、玉手箱のようで、びっくり箱のような家である。」
外観からは想像もつかない物語がたくさん詰め込まれています。行く先々に、はっとするような空間が。また住まい手の気配を感じ取るよう

「気になる」仕掛けが組み込まれています。この仕掛けが、住まい手に感覚的広さ、豊かさを与え、自然と家族間の関係性を深めることができます。

約10年後の私の家族を想定し、設計を行いました。家族は、奥さんと5歳くらいの子供ひとり。家族みんな好奇心旺盛。軽い運動や遊ぶことが大好きな家族です。

家族それぞれの趣味は、私は映画鑑賞、奥さんは読書、子供は遊ぶこととそれぞれ異なる趣味ですが、家の中では互いの気配を感じ合うような一体となつた

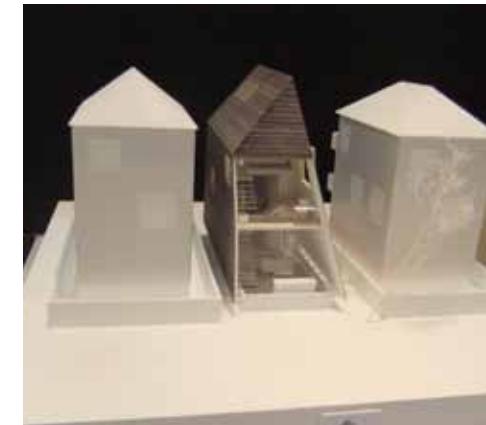
空間づくりを目指しました。

必要諸室を一直線上に並べ、各々の空間に特色を持たせます。それは、明るかったり暗かったり、天井高が高かったり低かったり、外部のような空間にしたりといふ

具合に、限られたスペースの中に無駄なく展開させるための手法として、らせん状に空間を構成させました。らせん状によって生まれるズレによる空間の関係は、

前後の空間の気配だけでなく、その上下関係の気配まで伝えることができます。結果、気にしながらどんどん統いていく空間は、まるで街散策をしているようで、

行く先々に、仕事をしていたり、本を読んでいたり、遊び回ったり……。そんな光景が見え隠れし、お互いの気配を感じあえる生活することができます。アクティブな
この家は、常に楽しく、ワクワクし好奇心を刺激します。



「気まぐれに浮かぶ屋根裏」

明治大学 大学院 理工学研究科建築学専攻

大谷 拓樹・浅野 宏一

自由で気まぐれな家。

僕はとても気まぐれで、何事にも熱しやすく飽きやすい。趣味に対してはそのような性格でも特に困ることはないが、「自分の家」を設計するとなると話は変わる。

何十年と自らがそこに住み続けることを考えれば、自分がその家に「飽きて」しまったら、その後の人生は退屈なものになってしまうのではないか。何かに飽きてしまうということは、そこに固定化された状態に慣れ過ぎてしまったり、意味に退屈してしまうことではないかと考えた。そうだとしたら、自分の家は堅苦しい意味や厳密な形式に縛られない、自由な家であってほしい。

このような着想から、自分の家の構想を始めた。

そしてその「自由」は、どこか「少しだけずれている状態」を生みだすことによって掴めるのではないかと考へた。家型のようでありながら、少し歪んでいること。屋根のようでありながら、壁のようでもあること。少し浮かんでいるように見えたりすること。居場所の距離感を自由に選べること……つまり、「捉えられない状態」であったり、はまた「どうとも捉えることのできる状態」であること。そのような状態こそが人に想像力を喚起させ続ける状態であり、いつまでも消費されつくされることなく存在し続けることが可能なのではないかと思う。

僕と息子で捉え方が一致しないような、そんな家。でも実は、それが「家」の当たり前の姿なのではないかとも思う。



「RE-FRAMING HOUSE」

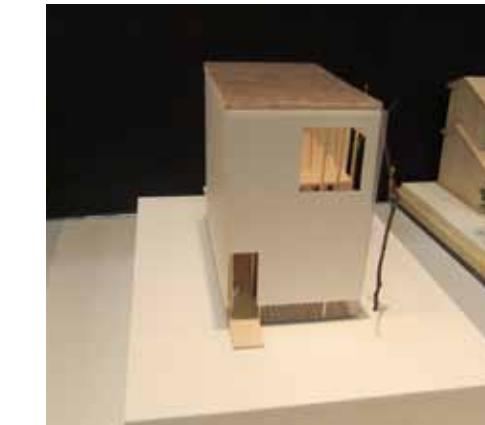
横浜国立大学 大学院 都市イノベーション学府
建築都市デザインコースY-GSA

富永 美保

「私の家」は家族それぞれの生活や習慣、
長期的な変化を受け入れる寛容な器であって欲しい。

従来の住宅のような、閉じられたプライベートの集合でつくられる大きな固まりとしての家ではなく、

外側の環境を調節し、またその内側に密度を与える、
多様な居場所の連鎖としての家を提案します。



「変わらない家」

中部大学 大学院
工学研究科建設工学専攻 博士前期課程

太田 雄太郎

変わらない価値観を大切にする家

変動する都市空間の中で変化しない場所としての住宅の提案である。

10年後も20年後も私は昔を懐かしむ時間を大切にしたいと思っています。

妻と息子の3人で住む家には幼少期に住んでいた街の記憶が詰まっている。

その街は坂が多い街で、坂が作る風景や視線の移り変わりが魅力的な都市空間を作っていた。

この家の大部分は斜めの床を持っており、生活の大半は坂の上で営まれている。

変化する事のない記憶の上で何年後も暮らしていきたい。



「SCHWARZWALD HAUS」

-建築家と音楽家が生きるための家-
Technische Universität Dortmund Raumplanung
ドルトムント工科大学 空間計画学部

Ryo Fukumoto

私達は現在、「黒い森」と呼ばれるドイツのシュヴァルツバイトで生活しています。

ドイツの人々は、何よりも自分たちの家を大切にしています。

ドイツ人は、長い時間をかけて育んできた伝統的な工法で家を建てる。家中には不必要的物は置かず、自分たちが必要とする家具だけを部屋において、人間と家具が共存しながら生活をおくっています。

しかし、家の空間に無駄がないかといえば、そうでもありません。ドイツの家の中は、大人の身長の二倍もの高さがあるトビラ、でっかいマド、3mをこえる天井、広すぎる廊下、音楽に捧げられた空間、家よりも大きな庭、それらは、日本人にとってみれば不思議なものばかりです。

けれども、私達はそんなドイツの家が好きです。

でっかいトビラやマドからは、朝になると光がすっと差し込んできます。

高い天井は、実際よりもずっと大きく部屋を見せてくれます。広い廊下は、親戚や友人が集まるとみんなで楽しくすごせる場所になります。ピアノがある部屋では、みんなのために音楽家がコンサートをひらきます。大きな庭は、休日に家族が日向ぼっこをして温まります。

建築も音楽も、はかることのできない価値を創りだすことできる仕事です。

そのような、不思議に見えるけれども、「はかることのできない価値を創りだせるような家」に私達は住みたい。

佳作 (28点・順不同)



「癖のある家」

横浜国立大学 大学院 都市イノベーション学府
建築都市デザインコースY-GSA

武井 良祐

人は誰でもその人なりの「癖」を持っていると思います。
私は家にも「癖」があるはずだと考え、自分の家に様々な「癖」を付けました。
大きすぎる扉、太すぎる柱、微妙に曲がった壁、いくつもあるエントランス。。。
「癖」は可愛らしかったり、ウザかったりします。
しかし「癖」はその人そのものであります。

家も「癖」を持つ事でその家でしかなくなると考えました。

ここでは私なりの「癖」を考え自分の家をつくりました。

私の奥さんは少し使いづらく、愛嬌のある私の家の「癖」を共有しながら生活しています。

あなたの家はどんな「癖」を持つでしょうか。



「変りと螺旋の家」

福山女学園大学 生活科学部
生活環境デザイン学科

鈴木 理咲子

10年後の未来を考えたとき、考えれば考えるほどその先の未来まで頭に浮かんだ。リアルな未来への想像は、その先の未来の想像なしでは見えてこなかった。もし10年後自分の家を建てるのであれば、その後もずっとその家で暮らし続けたいし、でもその家は常に自分の理想的な形であって欲しい。その時に合いながら、1つの家として変り続けていく住宅を提案する。

私は今回、「変る」為の具体的な要素としてアルキメデスの螺旋を用いた。アルキメデスの螺旋とは、極座標の方程式 $r=a\theta$ によって表される曲線で等間隔の渦巻きである。

必要によってどこまでも伸び続ける螺旋は、10年後であっても、30年、50年後であっても、常に自分の理想にあった形を与えてくれる。

私は10年後、2022年に31歳。

その頃には自宅に小さなアトリエを持ちたい。2、3年後にはスタッフが2人くらい。仕事の状況や必要によって螺旋はどんどん伸びていき、アトリエ部分は拡張していく。

30年後の2042年には51歳。

その後になら建築の仕事に一区切り付け、自宅でカフェを開きたい。近所の人たちが、ポソポソ訪れるような、ゆったりとしたカフェ。その頃には娘は独り立ちし、大学生の息子がいるくらいになっているだろう。カフェ部分が増築されることで、螺旋はさらに伸びる。

50年後の2062年には71歳。

老後は花壇や畠の手入れをしながらゆっくりとした時間を過ごしたい。螺旋は年齢と人数に合わせ、できるだけ広すぎない大きさに縮小させて、小さいながらもくつろげる家にしたい。

未来的な未来をえがくことで、見えてきた10年後の未来。

螺旋という形が常に変化することで、つねに自分の理想の形や広さとなる。そしてその家に最後まで住み続けられること。それが私の考える10年後の住まいである。



「浮遊する家 3つの箱とその間」

九州工業大学 工学部建設社会工学科

藤崎 琢磨

建築と服の設計/制作する夫婦、そしてスタッフのためのアトリエ兼用住宅。

用途目的がちがう3つの箱を浮かせ、箱の間に機能を挿入した。

まちに開かれ、そこをのぞいた人が集ってきそうなダイニング、プライベートが守られた寝室や、樹々に囲まれながら物事を考えるアトリエ....

プライベートを守るだけでなく、時間や場を共有できる住宅。

この建築を建てたときに、周りの環境やその生活風景を変えられるような建築を目指したいと思った。



「はなれのはなれ」

東京藝術大学 美術研究科建築専攻

佐々木 慧

自分の家、のなかにたつ自分の家、のなかにたつ自分の家。

「ぼくの家」
都会で暮らすための、なんの変哲もない、ぼくの家。

「はなれ」
ぼくの家の奥の扉を開けると、庭の先にもう一つ、家がたっている。

休みの日には、はなれにおでかけ。

「はなれのはなれ」
はなれの奥にある扉を開けると、庭の先にさらにもうひとつ、家がたっている。

この家にはぼくが集めた本がたくさんつまっている。
都会の生活に疲れたら、奥の奥にあるこの世界で、またあの本の中におでかけ。



「雁行の家」

法政大学 大学院 デザイン工学科建築学専攻

阪口 達哉

敷地は、都市型を選択しました。在宅勤務のわたしと妻が暮らす家です。

敷地の大きな都市部の住宅地では、床面積を多く確保するため敷地に目一杯のボリュームが設けられます。

そのため、隣棟間隔が狭く、表面積の少ない住宅となり、個々の家から垣間見られる生活は道路に面したファサードだけに限られてしまいます。

そこで、わたしは自分の生活の様々な場面があふれ出すような住宅を構想します。

軸を振り、雁行にボリュームを配することで、敷地に目一杯ながらも余白ができます。

余白に向かって大きく窓を設けることで、家を取り巻くように生活があふれ出し、住宅地のなかに自分だけの風景、家を作ります。

「雁行の家」は、誰しもが自分を表現することができます。

窮屈な隣棟間隔から個々を表現する外部空間を担保することで、従来の住宅地が抱える気薄な関係を脱却し、町単位の個性を創出します。

佳作 (28点・順不同)



「囲い」

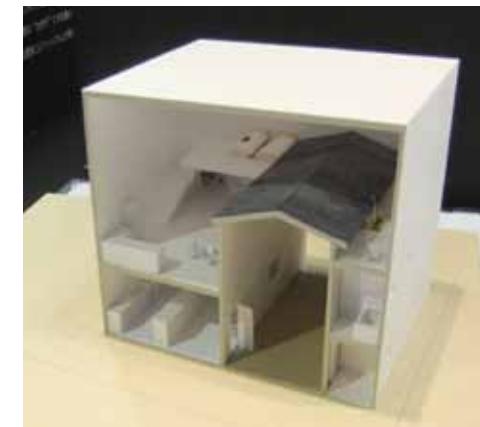
東京理科大学 工学部建築学科

山口 剛・橋本 光秀・糟谷 依里・河野 陽子
中島 敏博・鳥谷尾 美弥・増田 有佐・渡辺 慶一

家の中と外が分離されているカタチ。

今までには必然のカタチであったが、これから20年、30年後を想像したとき都市部は環境の変化が加速していくと考え、その变化についていく家造りではなく、まわりの環境に影響されない家造りをしたい。

近い将来では飛躍的な技術の進歩はないと考え、床・壁・天井の要素にルーバー・トップライトなどの操作を加えることによって新しい住空間を提案する。



「自分の家[続編]」

筑波大学 大学院 芸術専攻・建築デザイン領域

片山 豪

私の10,20年後のビジョンは地方の実家で、妻と、代々続くカフェを継ぎ、日々自適に暮らすことだ。

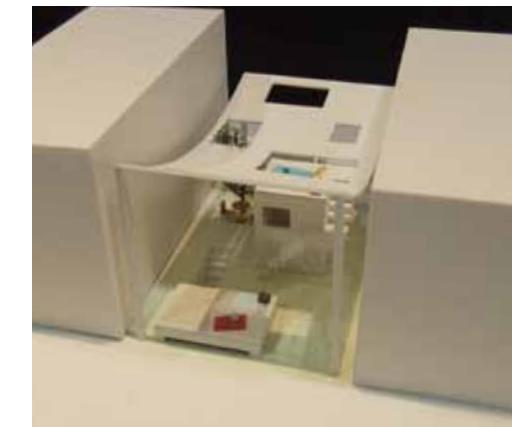
ただ気がかりなことが1つある。それは今、私が住んでいる「自分の家」のこと。老朽化が進行し、風化してしまったその姿は、10,20年後にも現役でいれるとはとても思えない。

いずれの建て替えは必須だが、この家の記憶や痕跡は自分にとって宝物であり、これから先も、かけがえのない「自分の家」として続けてほしい。

そこで、そんな大切な今の「自分の家」が、10,20年後も感じられるような家を考えた。

外皮を被せ、ボリュームが反転することによってできた家は、何十年と彼らを見守ってきたかつての壁が役目を終えながらも、違う表情で立ち振る舞い続けることで、この家・家族にしかない生活スタイルや風景を生みだす。

「今の自分の家」がいつもすぐそばで、生活の起点になりながら、これから新たな物語を見守っていくような10,20年後の「自分の家」、今の「自分の家」の続編。



「住み手不在に生きる家」

名古屋市立大学 芸術工学部
建築都市デザイン学科

刀根 真純

住み手が不在のとき家はどのようにふるまうのだろうか。

家は住み手のためにつくられてきた。

内部空間を豊かにすることは家を豊かにすることであった。内部空間が住み手との関わりを断つたとき、家は虚の空間となる。

しかし外部空間には家を豊かにする可能性を持っていると考える。

そこで10年後の自分の家として、他者を許容して住み手の不在に生きる家を提案する。

生活のために必要な機能を3つのボリュームに分けて配置する。

それらのボリュームの操作と大屋根によって居場所となる外部空間が生まれる。

外部空間は他者を許容し、敷地の中に住み手以外の生活が入り込む。

道路に近いところで誰かが座って休憩している。階段をあがつたところで誰かが読書をしている。木のしたのテーブルで誰かが食事をとっている。自分のいないときに誰かがこの家で生活している。自分の帰りを迎えるかのように待っている。

都市に建つこの家はまるで住宅地のなかの公園のように、隣の家にとっての庭のようにふるまう。



「ラックのいえ」

九州工業大学 工学部建設社会工学科

真田 匠

たくさんのラックが集まって出来ている住宅。

それぞれのラックは、プロポーションの違いや敷地内での配置などにより、異なる特徴をもつ。

ここで暮らす人々は、いろいろなラックの中で、創作の旅をしている。



「都市つき一戸建ての住宅」

立命館大学 理工学部 建築都市デザイン学科

佐藤 建

この住宅は、その名の通り庭の代わりに都市を持つ。

「庭つき一戸建てを持つのが夢」だなんてよく言われるが、現状の庭、もしくはそれに伴う住宅はプライベート性だけを追い求め他者を排除し都市に対して背を向け続けた結果、ほとんどだれもいない、閑散としたヴォイドとなってしまった。

「飼い犬と子供と一緒に庭で遊ぶ」というような理想は、理想的のままである。それが都市型の住居ならなおさらである。しかし都市には都市的魅力があり、都市型の住宅はみな、都市を持てるのだと考えれば、こんなに素晴らしいことはない。住宅のボリュームに切れ込みが入り、裂けるようにしてその切れ込みが広がることで、周囲の要素が浸透してきた結果パブリックで埋め尽くされる。住宅部分は極めて小さく、最低限のプライベート環境を守るだけのものに過ぎない。

しかしこの建築がパブリックの中にありながら、自分の周りの自分だけの世界を維持してくれているのだろう。周りにはカフェや小さな公園、小さな庭しか持てなかった老夫婦の家、木造アパートなど、その要素は多種多様である。隣のカフェの席が満席で、お客様さんがひとり困っている前庭のテラスを貸してあげればよい。都市中の小さな公園で物足りない子どもがいれば、ロッジア前の中央広場で遊べばいい。その代わり、そこに住む私たちは都市がもつ独特の賑わいや慌ただしいほどの充実感に満たされたのだから。10年後、20年後、都市の姿にそれほど大きな違いはないのかもしれない。

それでもちょっとずつ都市は変貌していくその絶え間ない変化を肌で感じていたい。

2012 residential design competition 「住宅設計コンペ」

佳作 (28点・順不同)



「ノキノデノウエデ」

日本工業大学 大学院 工学研究科 建築学専攻

土佐谷 勇太

家を包み込む「ノキノデ」は、
都市での暮らしを取りまく、多様な環境と生活の関係をなじませ
るように再編成する。

自然との関係。
建物との関係。
まちの人々との関係。
内外の関係....。

複雑に重なり合う関係をなじませ、受け入れる。
そんなおおらかな都市の住宅を目指した。



「考えながら/つくる家」

日本工業大学 大学院 工学研究科建築学専攻

田沼 大輔

植物を育てるように、住み続けながらつくる家でありたい。
時間をかけてこの家と向き合いながら、自分の家を考える。

それは、手間のかかる作業である。

生活の余白を見つけながら、住み手が作り手となった時に、
自分の家が出来上がると思う。



「団地から生まれた戸建て住宅」

~case of my future house : 廊下の家~

芝浦工業大学 システム理工学部
環境システム学科

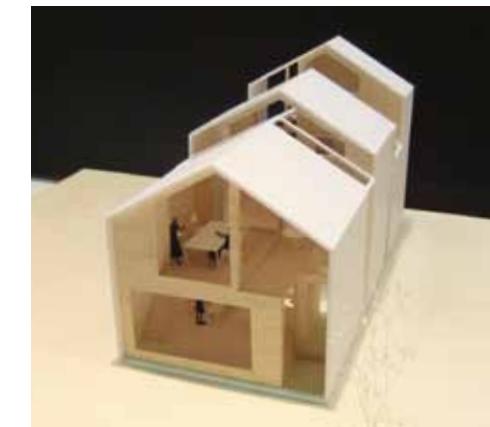
佐藤 康平

私は20年間団地で生活してきた。

団地内では公園や道、階段、そして家の中へと、廊下のようにひとつつのシーケンスが展開されていて、そのひとつつながりの空間の中では、距離感によって他者との交流の密度を調節していた。

そうした団地生活の要素を残した戸建て住宅のケーススタディとして、私の団地生活をもとに、20年後の私の家「廊下の家」を設計した。

「廊下の家」は、壁ではなく、廊下のような空間配置によって、外部と内部、個人と家族の距離感を調節し、周囲と常につながる安心感をもった団地のような住宅となる。



「私+家族+同僚の為の家」

ー白い器が包む、自分の巣

法政大学 デザイン工学部・建築学科

齋須 幸太郎

家は、自分の為だけの建築ではない。

そこに友人や家族等、他者がいれば、各人が快適な居場所を見つけて、様々に関係しあう、そんな賑やかさが未来の自分の家にはあってほしい。

しかし、個室同士につながりのない現代の家は、居場所のネットワークが生む豊かさを失ってしまっている。

そこで、様々な用途の諸室の関係性を捉え直す。私的な居場所と公共的な居場所をひとつつながりに同居させながら成立させる事で、関わりあうことで生まれる豊かさをつくろうと考えた。

居場所どうしの相性を考慮して、相互に関係をもたせたり、物理的な距離感をつくる。

手法として、単体ではひとつの用途しか持たない、家として不完全な棟を並べた。それらが寄り添い、補完しあうことで、初めて完成された家になる。

あらゆる現象がシームレスにつながったこの家では、大きな開口部から人の雰囲気が漏れ、階高の変化が距離感とプライバシーを生む。

そうした場の多様性と、穏やかな一体感の両方によって、自分の家が様々なアクティビティをつないでいくと考えた。



「僕の家、僕と彼女の家、
僕と彼女とこの子たちの家」

横浜国立大学 大学院 都市イノベーション学府

建築都市デザインコースY-GSA

石飛 亮

自分の家、将来の家について考えてみた。
よく「夢のマイホーム」という言葉を耳にする。
仕事に就き、家族ができ、ローンを組んで一生をかけて同じ場所、同じ家に住み続けるものがほとんどである。
そうではなく、もっと生活の変化に応じて移り変わっていくような家はつくれないだろうか。
そこに住もう人の構成に合わせて変化していくような家はつくれないだろうか。
僕は将来住みたい家について、漠然とした二つのイメージを持っている。
一つは地面と連続して住みたいということ、もう一つは天井の高い開放的な家に住みたいことである。
そこで、まずは一人で住む場所として天井の高い、からっぽの箱のような家を建ててみる。
そこに最低限の生活に必要なものだけを置いていく。
やがて生涯のパートナーと出会い、結婚し、その人と二人暮らしを始める。
以前のままでは足りないスペースを、天井を遮らないよう螺旋状にして床を足していく。
そのうち子どもが一人、二人と生まれ、家庭を持ち始める。
そのたび不足したスペースを補うように、またさらに床を一枚、二枚と足していく。みんなで集まる大きな床も足していく。
気がつくと空っぽだったはずの箱は、床でいっぱいになっていた。
最初の頃ほど天井の高さは感じられないけれど、そこには家族のあたたかい日常が詰まっていた。

2012 residential design competition 「住宅設計コンペ」

佳作 (28点・順不同)



「すき間のいえ」

京都工芸繊維大学 大学院
工芸科学研究科 建築設計学専攻

檜垣 政弘・曾根 拓也
大竹 純子

「自分の家」を考えた時、
都市であるからこそ「すき間」という外部空間を用いて、
外で暮らしたいと考えました。

小さな都市の敷地を更に二つに割り
600mmの隙間をつくりました。

そこに自分だけの庭のような微かに都市へと続く
外部空間である庭を配置します。

一人の家にもかかわらず、二つの家を持ち、そのすき間で暮らし、
自己的でありながら都市へと微かに繋がることが出来るような生
活を提案します。



「読者の家」

名古屋工業大学 工学部建築 デザイン工学科

春日 功助

「自分の家」というテーマを広義なものとして捉え、「これから社会像を映す住居」という個人にとどまらない普遍性をもった住宅を設計しようと考へた。現代において、nLDKという社会的なイデオロギーやそれに対する差異化に勤しむ建築家が提案する強烈な意味づけによって、ほとんどの住宅は説明可能であると思う。しかし、私は住宅は社会的な文脈や建築家の強烈な意味づけから自由になって、住人が主体的にふるまえる場であるべきだと考える。そこで、建築家を作り、住人を読者、そして住宅をテクストと読みかえて、この住宅を「読者の家」と名付けた。これからの時代はフランスの批評家R.バルトが「作者の死」を宣告した通り、テクストが作者の手を離れ、人びとに自由な解釈を与えるだろう。Googleのページランクシステムやオープンソース化したOSであるLinuxは読者・利用者に最終決定を預けているという点で「作者の死」の現れと言えるだろう。住宅も建築家の手から離れ、住人が自由に意味づける空間であるべきだと思う。この住宅では、まず既存の意味を剥ぎ取ることに徹した。個々の空間に室名はもちろん与えず、開口部の意味機能を解体することによって、住人の意志次第でどこでも窓になり、扉になり、玄関となるようにした。また、何も存在しない空間では住人はそこに意味づけができないので、空間に様々なグラデーションを与えていった。諸室の完結性を解除し、階層のヒエラルキーを崩すことによって、壁や天井で仕切られた空間はゆるやかにつながり、中間領域を形成していく。寝る場所・食事をする場所・本を読む場所・昼寝をする場所・晩酌を楽しむ場所・勉強する場所など、今まで室名などによって固定されていた意味は行動レベルに還元され、空間に対し自由な意味づけを可能にする。もちろん、すべての空間を常に使う必要なく、倉庫のように使う部屋などでもてくるだろう。最後に一つ断っておくと、「作者の死」という概念を引用したが、作者(建築家)は死ぬわけではない。建築家は統辞論的な記号操作に執心するのではなく、意味論的な深層構造にデザインの拠点を移すべきだと言いたいのである。つまり「意味をデザインする」のではなく「意味のつけ方をデザインする」べきであるということだ。



「私の町、私の敷地に建つ家」

東京理科大学 大学院 理工学研究科建築学専攻

田澤 孝祐

住宅地を歩いていると家は敷地に対して同じような建ち方をしていて、隣地との隙間は単なる隙間となり「敷地」に対する意識は低く感じる。家はそれ単体で生活を成り立たせており、敷地はあくまで補助的なものとして扱われている為にそのような状況を生み出しているのではないか。「自分の家」という事を考えてみた時、「自分の敷地」ということまで大きく捉える事が出来ればもっと生活に幅が生まれるのでないだろうかと考えた。また、敷地は「自分の敷地」であると同時に「町の敷地」でもあり、敷地に対する意識を高めるという事は、町に対する意識を高めるという事に繋がっていく。家を設計する時、家の各部屋と同じように重要なもののとして敷地を扱い、家と敷地を同時に設計する。そもそも何か建物を建てるときに一端敷地をまっさらにして、平坦な敷地に敷地とほとんど無関係な、それ単体でも成立する家を計画するという事自体を疑ってみる。このように計画する事は、平坦で均質な住宅地における家の建ち方として可能性のある手法であると考える。具体的な方法としては、家に対して敷地(地形)を巻き付けながら買入させる。地形と共に家には様々な場所が織り込まれていく。家の中に生まれる地形を中心として生活が展開され、今まで単なる隙間でしかなかったような敷地に対する認識が一変する。部屋はそれぞれが独立しているが完全に分断されているわけではなく、半地下のダイニングやキッチンなどの共用部分を中心として繋がっている。独立している部屋同士は地形を介することで関係性が生まれる。また、部屋は外部に挟まれたような構成となり、敷地に生活が表出しやすくなる。家に買入してきた地形は町と連続しつつの中を通り、駐車場上のテラスに接続されることで再び町に接続される。そうする事で地形を中心とした生活は常に町の延長線上にあるような状態となる。家は敷地と深く結びつくことで今まで以上に奥行きがあり、濃密で多様なシーンを持つものとなる。



「理想は胸に、手のひらに現実を」

和歌山大学 大学院
システム工学研究科 デザイン科学クラスタ

小林 史尚

あなたは20年後の自分を想像したことがありますか? 設計事務所で働き、趣味や好きなモノに囲まれ、家族3人で幸せに小さく暮らす。これは私が描いた20年後の理想的の自分で。しかし、これはあくまでも理想。現実に実現することの無い理想。理想を現実に実現することができるヒトは極少数。私は無理でしょう。理想は常に現実の上を生き、未来のことは誰にも分かりらない。たとえ自分自身のことにおいても。ヒトは自分の家を建てる時に理想を描く。理想と現実はこんなにも違うのに。

未知の世界である未来を想像し、自分にあった家を作ることは非常にこわいことである。理想を抱き、それに向かい躍進することは非常にいいこと。しかし、そこには実現不可能な現実があることを忘れてはいけない。理想を抱き、現実と向き合いで今を精一杯生きること、それが重要。本提案は、今私に最低限必要な機能と、未來への余白を持った家である。自分の時の流れに伴う変化に対応し、自分と家が共に変化し、理想に向かう。自分に起きる出来事に併せ家ができるかぎり自らの手で作り上げていく。

そのためにコの字型の構造を用意し、内部をその時に必要な機能に自分で作っていく。今回は自分の理想である、土間、ロフトがある、限りなく小さな家を目指した。

今私に必要な最低限の機能を最初の家に詰め込み、以降は流れにまかせできることによって変化していく。

今回は私の理想の将来を描いたが、現実はいったどんなカタチをとっているのか。必要最低限の機能のみをもった家と共に楽しみにその時を待つことにする。

理想は胸に、手のひらに現実をさて、あなたの理想の家はどんなモノでしょうか?

あなたがどんな理想と現実を描くのか、これから楽しみです。



「街の中の家、家の街」

立命館大学 理工学部 建築都市デザイン学科

林 晃平

今、どこにでもある住宅街を見てみると、どこも同じような風景が広がっている。消費社会となり住宅は建てるものではなく買うものとなつた。敷地にどんと買ってきた家を置くように。その住宅は快適性を求めるあまり設備による環境のコントロールやプライバシーの確保のために個室主義となり閉鎖的なものとなつた。その結果住宅地は閑散としている。住宅内に街がそのまま侵入してきただろうか。そんな住宅を提案する。10年後、私は妻と幼い息子、両親、祖母と暮らしているだろう。世帯主は親父で若く独立し設計事務所をかまえる私は金銭面に余裕がなく両親の家に事務所を付設する事になる。そこで新しくこの住宅を設計する。10年後の時点で必要な最低限の部屋を大きな家型の箱に部屋となる箱としておさめる。さらに10年が過ぎ、その間に息子も大きくなり娘も生まれた。新しい部屋が必要となったため今ある部屋の上に小屋のような簡単な部屋を作った。この家型の箱の中には時間の流れと共に変わる家族構成に応じて部屋が増減する。都市において新しい建物ができたり取り壊されたりするように。この家を都市とし廊下を道、部屋を建物のように扱うことで更新していく。部屋の外は家中でありながら少し街に近い存在となる。ポツポツ開いた窓が街の風景を切り取るとともに、外へ生活の気配がにじむことで街の人々にとってこの家はほかの家より少し近い家となる。最終的にこの家がどうなっていくのかはまだわからない、ひょっとすると自分の子どもが出ていく夫婦ふたりになり空間を持て余すようになれば、屋根の窓を取り外したり、シェアハウスにし新たな住人と余生を満喫することもあるかもしれない。お店をやってもいいな。時代によってライフスタイルは変わっていく。しかし、それを受け入れつつ順応する家ならいつまでも共に変わらず暮らしていく。

これが私の「自分の家」です。

2012

residential design
competition
「住宅設計コンペ」

佳作 (28点・順不同)



「矛盾の家」

工学院大学 大学院 工学研究科・建築学専攻

加藤 直樹・鈴木 甫

「自分の家」というテーマに違和感を覚えた。

郊外に建つ家々がどれも同じ向きに、同じ表情で建っている。
そこに「自分」を感じることができなかつからだ。

ここでは「自分」が家の中に閉じこもり、
家の中だけで完結してしまっている。

家の在り方を再考する。
家を建てるには土地が必要であり、
その土地には風土があり土地特有の地域性がある。

家を建てることは家族を守るものであり、
社会と繋がるものであると考えた。

家は矛盾を内包している。
私たちはこの矛盾を繋げる家を提案する。



「棚とテーブルの家」

室蘭工業大学 大学院 建築社会基盤系専攻

宮平 祐

近い未来、ライフスタイルの大きな変化が起きないだろう。
人々の生活は日常を繰り返すばかりである。

私たちの日常はいろいろな出来事と繋がり連続していく、そこには人の営みがあり、生活の楽しみが生まれる。しかし、生活していくためには、様々なものとの関係を整理し、分類していく必要がある。

そこで棚とテーブルというコンセプトで繋がる事と分ける事を共存させたいと考えた。

まず、ひとつの部屋をひとつの棚と考え、大きさの異なる部屋を何個も用意し、グリッド状に並べた。次に、ほんどの部屋を貰くよう大きなテーブルを1階に設えた。

この大きな水平材は床や天井になり、1階では動線として部屋と部屋がだらだらと繋がる。動線としての水平材は、各部屋に身を落ちさせた時、テーブルとして拠り所となる。

そして、テーブルの下を覗きこむと水平に視界が広がり、他の部屋が垣間見え、更にその先の外部へと視線が繋がる。地下階で大きなテーブルは様々な物事を反射する天井となり、外部の様子、別れている部屋同士の雰囲気を伝えてくれる。

この住宅に住むのは、都市に住むことを選択した夫婦と子供1人の3人の家族である。土地は狭いながらも、都市に住むことの豊かさを享受できる。家族はそれぞれ違った趣味を持っているが、その価値觀を共有している。

たくさんの部屋を持ちその時々の気分によって自分の居場所を見つける。家族同士が部屋で別れ離れていても大きなテーブルによってつながっている。

様々な部屋を持ちながらも、大きなテーブルを共有し拠り所となる住宅。



「ハコ・ニワ」

日本大学 大学院 生産工学研究科

佐藤 文悟

街を歩いていると砂やコンクリートに埋もれた庭によく出会う。

雑草すら生えない、まるで干上がった土地だ。特に建物が密集した都市部の住宅ではこのような風景が顕著である。

住宅において敷地の多くの部分を占める庭をデザインしていくことは、生活に彩りを添え、四季の移ろいを演出し、豊かな住環境を整えることに直結する。

一方で最近のTVCなどでの広告媒体で見受けられる住まいはどうであろうか。「オール電化」「スマートハウス」「エネファーム」などの設備に重点が置かれ、住宅が人の生活の場と離別しているように見える。さらには施工時の建設コスト削減のため、庭のデザインをないがしろにする傾向があるのだ。

かつて三種の神器が現代人の生活を大きく変化させたように、住宅において設備も重要である。しかし住宅というものは、人が暮らしている場としてある以上、人と人との関係ないし、人と自然との関係について考えていくべきなのではないだろうか。言い換えれば、庭と住まいとの関係性や暮らしが彩る庭のあり方にについて、考え直す必要があると感じた。

私は豊かな庭に囲まれた家に住みたい。

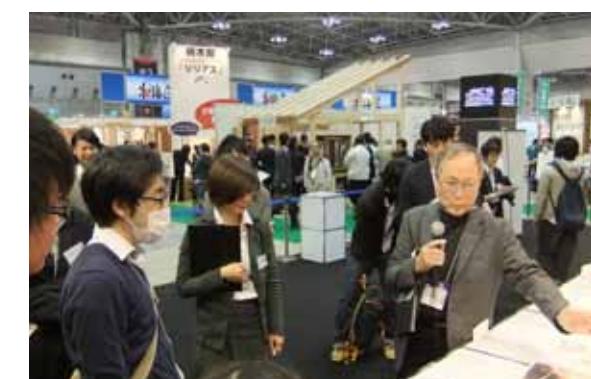
ハコ(住宅)の中にニワ(庭)を取り込むことで、ハコニワ(箱庭)をつくりだす。ハコに囲まれることで、ニワが、プライベートな空間へと表情を変える。よりプライベートな空間となることで、生活空間との距離が縮まり、と密接に関わり出します。

様々な植物にあふれたハコニワからは、住宅内に木漏れ日が差しこみ、生活に表情を与える。季節が変われば、ニワも移ろっていき、そのたびに手入れを行い、互いに関係し合ながら、豊かな住まいをつくり出していく。

2012 residential design competition
「住宅設計コンペ」

二次審査の様子

平成24年 11月14日(水)
会場:東京ビッグサイト(ジャパンホームショー会場)



jury



Kensuke Yoshida
吉田 研介
吉田研介建築設計室



Kiyoshi Kasai
葛西 潔
葛西潔建築設計事務所



Kiwako Kamo
加茂 紀和子
みかんぐみ

time schedule

2012 residential
design
competition

エントリー受付開始 **平成24年 5月27日(日)**

JACSホームページのみ
URL : <http://www.jacs.cc/>

エントリー締切 **平成24年 8月24日(金) 17:00迄**

1次応募締切 **平成24年 9月3日(月) 17:00迄**

郵送先 : JACS新潟事務局(株式会社ステーツ内) 〒950-0148 新潟県新潟市江南区東早通1-1-40 Tel.025-383-3003 Fax.025-383-3733
データ送信先 : kazama@states.co.jp (pdfもしくは、jpeg:200dpi以上し、フォルダにまとめ、zip・LZH圧縮し送信)

1次審査 **平成24年 9月8日(土)**

会場:JACS東京事務局 〒136-0072 東京都江東区大島1-30-3

1次審査結果発表 **平成24年 9月9日(日)**

・1次審査会場と同会場にて1次通過作品を展示
・JACSホームページに審査結果を公表 ・メールにて受賞者に通知 ※1次審査通過者は2次審査の準備をお願いします。

2次応募締切 **平成24年 11月9日(金) 17:00迄**

郵送先 : JACS東京事務局 〒136-0072 東京都江東区大島1-30-3 Tel.03-3685-8484 Fax.03-3685-2514

2次審査
講評会・表彰式 **平成24年 11月14日(水)**

会場:東京ビックサイト(ジャパンホームショー会場にて)
講評会・表彰式は2次審査後に同会場にて開催

受賞作品の展示 **平成24年 11月15日(木)
11月16日(金)**

会場:東京ビックサイト(ジャパンホームショー会場にて)
JACSホームページにて審査結果を公表

prize

下記賞品を受賞された方に差し上げます。

- 最優秀賞(1点) 賞金100万円
- 優秀賞(2点) 賞金10万円
- 佳作(27点) 賞金1万円 (ただし模型提出者に限る)

(1次審査を通過し、2次審査にエントリーした作品全てを入選とします。)

最優秀作品を始め各入賞作品のうち、
設計者の希望するものについては、
建築・販売を実現するため、JACSが全面的に
バックアップ致します。

事務局

東京 〒136-0072 東京都江東区大島1-30-3 (株)アトリエ・ジャム内 Tel.03-3685-2511 Fax.03-3685-2514

新潟 〒950-0148 新潟県新潟市江南区東早通1-1-40 (株)ステーツ内 Tel.025-383-3003 Fax.025-383-3733

info@jacs.cc